

地域文化を生かしたまちおこし
「雪舟を通じて新たな交流を生み出す」

第十三回
雪舟
サミット
【記録集】

SESSHU SUMMIT
IN IBARA



【サミット会議】



サミット会議

テーマ

「地域文化を生かしたまちおこし—
雪舟を通じて新たな交流を生み出す—」



【司会】

それではただいまから雪舟サミット会議をはじめて参ります。

まず、各自治体の方々から自治体のご紹介と今回のテーマに沿った取り組みの発表をお願いいたします。第13回雪舟サミットのテーマは、「地域文化を生かしたまちおこし 雪舟を通じて新たな交流を生み出す」です。なお、大変恐縮ではございますが、時間の都合上、発表は各団体ごと10分ずつをお願いいたします。

発表順ですが、開催地ここ井原市を除いた5つの自治体から、50音順でご指名をさせていただきます。

それではまず、福岡県川崎町の手嶋町長、お願いいたします。

福岡県川崎町

ただいま、ご紹介いただきました福岡県川崎町の町長の手嶋秀昭です。本日は、雪舟ゆかりの市と町の関係者が集いまして、

ここ井原市で、このように盛大に「第13回雪舟サミット」が開催されますこと、心よりお喜びを申し上げます。それでは、サミット会議のトップバッターとして、大変恐縮でありますけれども、早速本町の報告をさせていただきます。

川崎町は、福岡県のほぼ中央にございまして、福岡市と北九州市と三角形で結んだ一角にござ



います。耶馬日田英彦山^{やばひたひこさん}国定公園の中の、靈峰^{れいほう}英彦山^{ひこさん}のふもとに位置をいたしておりまして、南北に細長く伸びた地形をいたしてあります。

川崎町は、かつては大小数多くの炭坑を有する石炭産業中心の町で、人口は、石炭産業最盛期の昭和33年には43,000人を超えていました。現在は約19,500人ということで、世帯数は9,500世帯となっています。

エネルギー革命後の現在では、福岡市、北九州市近傍に位置している利点を活かし、豊富な自然環境と共生した農業や観光を中心に活力あるまちづくりを目指しているところがございます。

川崎町には中元寺川をはじめ豊かな水源と、南部の戸谷ヶ岳^{とやがだけ}を中心とした緑に恵まれておりますが、特産品につきましては、近年の自然志向による、産地直産品の需要からイチゴ、なし、ぶどう等の生産が盛んに行われておりまして、生産量も順調に伸びております。特にイチゴは、大ヶ原^{だいがはら}地区で車椅子でも収穫ができる「エコ観光ハウス」が完成をいたしまして、多くのイチゴ狩りが楽しまれておるとい状況でございます。

また、平成16年度の川崎町農産物直売所「De・愛」と翌17年度の農産物加工所の完成以降、これら果物をはじめ、地元で採れた新鮮な食材を提供しようと、農家の女性たちによる「餅グループ・惣菜グループ・パングループ」とが組織され、地産地消のもと安全にこだわった農産加工品を製造販売いたしてあります。

さらに、新しい特産品づくりを目標に「ゆずとあんずの里づくり」を目指しています。ゆずは、数年前から植栽が始まり、現在7,700本までになりました。あんずは目標5,000本に対しまして現在1,000本まで植栽をいたしてあります。

この他、「以心丹田川崎地域力活性化協議会」

の加工部が、地産地消型のふるさとの味を追求した新商品の開発を進めております。地元の農家との連携により新しい産業の振興システムづくりを進めておるところでございます。

川崎町における主要なまちづくりの一つは「積極的な観光資源の開発」でございます。小学校の統廃合により廃校となった旧安宅^{あたか}小学校の校舎を活用し、本年4月、都市と農村の交流と本町の観光の拠点として、宿泊施設とインターネット環境等のインフラ整備をいたしまして、「安宅^{あたか}交流センター」をオープンいたしました。

このセンターには、内閣府の教育特区の認可を受けまして、広域通信制高等学校が昨年4月に開校いたしました。「川崎特区アットマーク明蓬館高校」こういう学校が現在ここで活動をいたしてあります。

この安宅^{あたか}交流センターを基地として、福岡県快適な環境スポット30選にも選ばれた「安宅^{あたか}の彼岸花群生地」で、昨年度から実行委員会による「棚田彼岸花まつり」を始めました。本年度は、これに加え、福岡県と共催で「棚田ウォーキング」もドッキングして開催し、県内外から家族連れやアマチュア写真家など多くの方々が訪れていただきまして、また、マスコミにもたびたび取り上げていただきました。連日ほんとに多くの方が来ていただいたということで交流人口を増やすことができたというふうに思っています。

また、このセンターでは、農業体験学習もとりおこなっておりまして、今年度、子どもたちの心と体を育てる食育推進事業の「子どもファーム・イン・あたか」を開催いたしました。さらに、今年度の経済産業省・地域新事業移転促進事業として、全国4ヶ所の内1ヶ所として選ばれて、農商工連携の都市農村交流マネジメントコーディネーターの育成を目的とした「えが

おの学校」の設置が決定し、現在講座が開催されています。

一方、農産物直売所「De・愛」や農園レストラン「ラピュタファーム」などは、近年の田舎・農村暮らしブームや食の安全、地産地消に対する関心の高さなどから、着実にリピーターを増やしております。都市と農村の融和をめざす「ラピュタファーム」は、ブドウ、なし狩りも体験することができまして、自家野菜を使うレストランやパン工房が整備されております。先月は、生産者と消費者との交流を通じて筑豊地区の味覚を紹介する「食と農の達人祭」が開催されました。多くのイベントを通じ、たびたびテレビ番組や情報誌などで紹介をされております。

この他、町民の方から観光地である「安宅の滝」の周辺の用地を寄贈していただきました。これを機に本年3月、安宅の滝の周辺及び森林ハイキングコースの整備工事を行いました。併せて町指定文化財である戸山原古墳の周辺整備事業も行なったところでございます。

農産物直売所「De・愛」から「藤江氏魚楽園」を結ぶ「雪舟ロード」の開通とあわせ、これら一定の取り組みによって、魚楽園～雪舟ロード～農産物直売所「De・愛」～ラピュタファーム～戸山原古墳～安宅の滝～戸谷自然ふれあいの森～安宅交流センターまでの大きな観光ルートができあがりました。

これからの川崎町の主要事業の一つは、「健康づくり日本一のまちづくりの実践」でございます。

これまで様々な事業を取り組んできましたが、町民が健やかに生き生きと暮らすために最も基本となるのは「健康」であり、その「健康」を確保し、生活の質を高める、これは全町民の願いでもございます。

昨年5月、町内の52団体による「町民健康づ

くり推進協議会」を立ち上げ、町民と行政の協働による健康宣言を行ない、さらに6月には、全ての町民が健康で活力のある社会を実現することを目的として「町民健康づくり推進条例」を制定いたしました。

併せて、その取り組みが声かけだけに終わらず、具体的な推進機能を有するために、本年8月、町長を本部長とする「町民健康づくり推進本部」を立ち上げ、庁内の全課を、食育部会、保健予防部会、体力づくり部会の3つの部会に複合配置し、実践組織として取り組みを進めています。

まず本年4月、町民の具体的な健康づくりのための施設として、B & G体育館に、筑豊地区随一の健康器具を設置した「トレーニングルーム」をオープンいたしました。また、このトレーニングルームでの効果的な運営推進のため、現在2名の雇用を行ない、「健康インストラクターの養成事業」を行なっています。

さらに、将来を担う子どもたちの健康づくりで大変重要である「食育の推進」として、今年度から2ヵ年かけて、総事業費9億円の「学校給食センター」の移転改築事業を行なっています。この給食センターには、太陽光発電パネルを設置し、また「元気な子どもたち」を育成するために、「完全米飯給食」に切り替えていきたいと考えております。そして、地元で作った安心・安全な食材を使った「地産地消型」の給食事業を推進するため、具体的な営農指導も今後進めていく予定にいたしております。

また、本町の恵まれた素晴らしい自然や資源をもっともっと快適に体感してもらう、そのために「おすすめのウォーキングコース」を新たに設置をいたしました。現在そのウォーキングマップの作成に取り掛かっています。

そして、現在、本町の森林環境を活用して効

果を目指すため、「森林セラピー基地」の認定申請の準備を進めています。

いずれにいたしましても、この「健康づくり日本一のまちづくりの実践」は、現在、高齢者医療費の減少や健康スポーツ人口の増加など、少しずつですが成果を上げてきております。

次に本町は、「新エネルギーによるまちづくり」を進めています。「川崎町地域新エネルギービジョン」の策定を受けて、本年2月、川崎町老人福祉センターに「太陽熱利用給湯システム」が完成いたしました。

老人福祉センターの入浴施設には、お年寄りを中心として年間のべ4万人の町民が利用いたしておりますが、近年の化石燃料の高騰により施設の運営に大きな支障を与えていました。このため、この施設にクリーンな自然エネルギーである太陽熱エネルギーを給湯システムに利用することで、石油燃料の使用量と地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出量の削減、さらに、施設運営のランニングコストの大幅な縮減を進めています。

本町は、さきほどお話を申し上げたように学校給食センターの太陽光発電システムと併せ、この太陽熱エネルギー導入をきっかけに、「かつては石炭で栄えた町が、これからは新エネルギーモデルの町へ」と転換し、21世紀に向けた新しい川崎町のまちづくりを推進をしていきたいと考えています。

次に、本町では、平成17年度の西鉄バス路線の廃止以降、「町バス・福祉バス・巡回バス」の3つの代替交通を運行しておりましたが、国交省の補助を受けまして、これを新たに見直し、平成20年度に「公共交通総合連携計画」を策定し、昨年9月、交通弱者の生活維持と効率的な路線維持を目的として、「ふれあいバス」の運行をスタートいたしました。これから超高齢社

会の到来に備え、町民が気軽に安心して利用できるコミュニティバスの運行を目指していきたいと考えています。

次に、「文化の振興と人づくりの推進」であります。本町には美術館がありませんが、昨年の11月、川崎町の玄関口である駅前商店街の空き店舗を活用して、ミニ美術館的なギャラリーとして「川崎町駅前ゆらり」を新設いたしました。

これは、町民や町外の方にも多くの方々に、自由な空間として開放して、積極的に芸術や文化の振興を図っていただく、なおかつ、川崎町商店街や駅前の活性化を図ることを目的としております。

昨年11月22日にオープンいたしましたので、ただ今ちょうど1周年となりますが、これまで、35回の企画展のほか、音楽会や落語会など開催し、約9,000の方が来場しています。現在、この1周年を記念して明日の21日まで、懐かしい家電品や資料、昭和の居間の再現コーナーの紹介など「昭和レトロ展」の記念行事を開催をいたしております。

また、「まちづくりの基本はひとづくり」でもございます。川崎町がこれから輝いていける町として飛躍していくためには、町民の意識改革、特にボランティアアティックな発想が必要であり、そのためにこれから「リーダーの育成」が必要でもございます。

平成20年度からスタートして今年で3年目に入りますが、九州大学地域形成学グループと本町の共催で、「地域創成リーダーセミナー」を開催しています。このセミナーでは、リーダーの資質養成に必要な「地域社会を生きる知恵」を、参加者と講師陣が力を合わせて探っけながら、新しいリーダーの創成を進めております。

川崎町に国指定名勝「藤江氏魚樂園」がございます。魚樂園の名称は、仏教の経文の中より「魚楽しければ、人また楽し」という文から名づけられたもので、人も魚も鳥たちもすべてが大自然の中に調和した桃源郷を意味しております。

この庭園は、僧雪舟が九州を旅した際、1469年、49歳の時に藤江氏宅に足を留めて3年間滞在する中で、絵画型の庭園が築庭されたものであると伝えられ、天然の山を利用し、池を庭の中心に石を組み、ツツジを配し、背景となる山に自生する楓、赤松、杉など樹木と調和して、古園のたたずまいを見せております。

「藤江氏魚樂園」は、昭和53年に国の「名勝重要文化財」として指定されております。平成20年から名勝庭園周辺調査で、庭園に接する石段・石垣・石組などの遺構が、江戸時代以前の古い史跡と確認され、現在、「新たな指定地域拡大」の詳細調査を行っております。

来年平成23年4月の文化庁記念物審議会へ諮問・答申が戴ければ「国指定重要文化財」として新たに指定されることになり、本町の文化遺産、観光の名所・旧跡に新たに加えられることとなります。

このような中で、川崎町では、「雪舟」をキーワードとしたまちづくり、ひとづくりとして、平成12年度から「日中交流水墨画公募展」を隔年で開催しております。来年には第6回目を迎えますが、出展者は、青森から鹿児島まで全国的に拡がりをみせ、出展数も300点を越えています。芸術を鑑賞できる機会をつくり、川崎町における水墨画の普及・発展を図り、町民の文化・芸術に対する意識の高揚につなげていきたいと考えています。

また、例年11月には、雪舟さんの魚樂園顕彰会による「雪舟さんの紅葉祭り」が開催されま

すが、今年も先週の11月14日に開催されました。ちょうど今、紅葉の季節真ただ中にありますが、新聞・テレビで連日のようにこの魚樂園が報道されておりまして、多くのお客さまでにぎわっている、という状況でございます。本来ならば、この藤江さんの当主であります藤江さんも今日お見えをいただくところでありましたけれども、テレビ出演のために残念ながら急遽参加できなくなったというような状況もございます。また、同日はこれに併せて、JR日田彦山線活性化推進沿線自治体連絡会による「^{ひたひこさん}ひたひこウォーキング」も開催されました。雪舟さんの足跡を訪ねるとともに、文化遺産や観光施設を巡り、再度川崎町を見つめ直し、健康づくりも兼ねた取り組みとして多くの方々の来客が期待されております。

川崎町では現在、「川崎町観光振興基本方針」を策定しています。この中には、「観光とツーリズム」を基本とした体験プログラムの開発などもあわせて折り込まれております。今後は、さらに「画聖・雪舟」をキーワードとした観光戦略を進めていき、本町の新しいまちづくりのコンセプトである、「炭坑の町から、太陽に向かう町へ」、つまり「太陽に向かって進んでいく、明るい元気なまちづくり」を進めていきたいと思っております。

最後に、本日のテーマにもありますように、「雪舟を通じて新たな交流を生み出す」に少し触れておきたいと思えます。

本町も今日まで、ルーマニアや中国、韓国など国際交流や青少年海外研修などを取り組んでまいりました。今後は少し、「雪舟ゆかりの市と町の交流」に目を向けていきたいと思っております。

例えば青少年を軸とした文化・スポーツ・体験などの交流事業にチャレンジしていくのもよ

いのではないのでしょうか。若い世代の交流は、必ずや大きな成果が芽生えてくるものと思っております。ぜひこの雪舟サミットの目的である交流事業としてご検討いただければと考えております。

以上、川崎町の紹介・取り組みについてご報告をさせていただきました。

本日、本サミットに参加の皆様方、貴重な報告を拝聴することが出来、これからの新しいまちづくりにおおいに役立てたいと考えております。

今回のサミットにご尽力をいただきました井原市の皆様を始め、関係者の皆様に心から感謝を申し上げまして、報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。では続きまして岡山県総社市の竹田副市長、お願いいたします。

岡山県総社市

ただいまご紹介をいただきました、総社市副市長の竹田でございます。本来でしたら、片岡市長がここにまいりまして皆様にご挨拶申し上げるところでございますけれども、本日は所用で来られませんので、私の方が代わりにご挨拶、ご報告をさせていただきますので、よろしくお



願いいいたします。

総社市は岡山県の南部、やや西寄りのところに位置しまして市の中央を岡山県の三大河川の

ひとつ高梁川が貫流し、南部には平野が広がっています。中央部から北部にかけては、標高200m～400mの山が連なり、山々の中に集落が形成されています。

ちょうどこの井原市さんとは北部で接する位置にありまして、東部に岡山市、そして南部は倉敷に接しているということで非常に交通の面でも有利な位置にあります。

また瀬戸内特有の温暖な気候で、高梁川の豊かな水をはじめ、非常に環境にも恵まれておりまして、カルピスでありますとか紀文食品、あるいは山崎パンといった食品製造業が進出していまして、現在の人口は約68,000人、面積は212平方キロメートルになります。

次に総社市の歴史についてふれさせていただきますと思います。

総社市周辺には、古代から吉備の国の中心として栄え、全国有数の古墳や数千もの古墳群がありまして、当時の繁栄を今に伝えていております。またこの絵にありますとおり、桃太郎伝説のもととなったといわれる温羅伝説が残ります古代朝鮮式山城である鬼ノ城は、近年の発掘調査で全国の脚光を浴びているところです。

この鬼ノ城は、急な斜面の上の山頂部にございまして、非常に眺めがいいという事で、復元されました西門には多くの方が訪れ、そこからの眺望を楽しまれていて、観光スポットとしても期待されているところであります。

また飛鳥、奈良時代には、国府、あるいは国分寺や国分尼寺が置かれるなど、備中の国の政治・経済・文化の中心として栄えておりまして、早春には淡いピンクの桃の花が彩り、しばらくしますとこちらの写真のとおり、周囲の田んぼがれんげ畑に変わり、国分寺周辺のゆったりした風景を一層和ませていております。

このような風景を見て非常に懐かしく思う方

も多く、大勢の方が繰り返し訪れていただいているところです。

平安時代末期には、備中国内の324の神々を合祀しました総社宮が建てられ、この門前町が市街地の素地となっていて、市名の由来にもなっています。このように古代から吉備文化の中心として栄えた総社市には、数多くの文化財が残されています。

特産品としては、果物王国岡山の代表でありますぶどうや桃、そして古代から受け継がれてきた赤飯のもととなったといわれます赤米、これらを使いましたお酒やうどんなどがあり、特産品として売り出しております。

また皆さんご存知のとおり、先ほど宮島先生のお話にも出てまいりましたけれども、雪舟さんは、室町時代に総社の東部「赤浜」で生まれたということでありまして、雪舟の生誕地には記念碑が立てられております。

その雪舟さんは、幼少時代をこの写真にあります宝福寺で修行したということでございます。

雪舟さんが修行をせず絵ばかりを描いていたため、とうとう怒った和尚さんが、雪舟をこらしめようと柱に縛ったところ、雪舟が自らの涙で描いた本物そっくりのネズミを見た和尚さんは感心して、それ以降、雪舟さんが絵を描くことを許したという逸話が残っています。

このように雪舟が幼少時代を総社市で過ごし、画聖としての礎を築いたことについては、本市としては非常に誇りに思うところでございます。

また、今宝福寺も紅葉の見ごろとなっており、毎日大勢の方が訪れ、その美しさに魅了されているところでございます。

この宝福寺の紅葉をより多くの方に楽しんでもらうと今年から宝福寺のライトアップを行っております。これは総社の観光についてこれからどうしていこうかという検討をしております

ました総社観光プロジェクトの実行委員会の企画でございまして、今週月曜日、15日から本日20日までの間、開催しているものでございます。

期間中はフルートやビブラフォンの演奏、また普段非公開であります方丈も公開しております。大変多くの方に楽しんでいただいております。間に浮かぶ宝福寺と境内を彩る紅葉が幻想的な雰囲気醸し出しております。

次にサミット会議のテーマについてご報告をさせていただきます。総社では3つの展開をいたしておりますのでここでご紹介させていただきます。

まずはじめに「雪舟顕彰事業の成果」についてですが、市で交付しております125cc以下のバイクのプレートにご当地ナンバープレートを採用しました。このプレートには二種類ありまして、1つは「ネズミのシルエット」。これは先ほどの雪舟の逸話にちなんだものでございます。もう1つは「吉備路の五重塔」。総社の風景を代表する吉備路の五重塔がれんげに彩られている様子であります。この二つから選択できる形でのナンバープレートとしておりまして、ご当地ナンバープレートの中で選択式というのは珍しいということで非常に人気もでございます。これまで希望番号の受付、あるいは希望デザインの交換の受付をしておりますけれども、現在ナンバープレート登録が約4,700あります。このうちの約16%、二割近くの方から交換、あるいは希望ナンバーを希望したいという申し出があり大変好評を頂いております。

次に「雪舟の里墨彩画公募展」ということでもございまして、平成8年度から隔年で実施いたしております。今年2010年で8回目を迎えました。全国から329点の応募をいただきまして、審査の結果、雪舟大賞は東京都にお住まいの、宇高健太郎さんの「枯蓮」が受賞されました。こち

らにあります絵のとおり、無彩色の階調を生かしながら、静かな情景のなかに奥行きを感じられる作品ということで、墨彩画の特徴を生かした素晴らしい作品となっております。年々この墨彩画のレベルも上がっておりまして、非常にうまくっております。

次に「市民参加の文化事業の推進」ということで、先ほどご紹介もありましたが、今年はこの岡山県で国民文化祭が開かれまして、こちらにあわせまして総社市では日本画の美術展を開催しました。全国から公募で選ばれました日本画99点と、先ほどご紹介いたしました墨彩画公募展の入選作品55点を一堂に展示しまして、連日大勢の方にご覧いただきました。

また国民文化祭では、先ほどの日本画とあわせまして民話の祭典、それからシンポジウム、そしてこの写真にありますとおり和太鼓の競演を実施いたしました。ここ井原市からも井原鏡獅子^{なごき}長発太鼓の保存会の皆様をはじめとして、県内あるいは県外から多数の団体にご参加いただきまして、連日立ち見の方が大勢おられるほどの大盛況ということで非常に人気のある事業となりました。

次に、「地元の農産物を使ったホットドッグで総社を元気にしたい。売り出したい。」という熱意のもと、観光あるいは経済などの関連団体が集まりまして、総社ドッグ普及研究会というものが発足し、先般総社ドッグとして売り出しました。総社でとれた農産物、あるいは製品を2種類以上使うというもので、大変好評を受けております。また一昨日の18日には、市内の学校給食にもデビューいたしまして、子どもたちにも大変人気があったところでございます。

3つ目といたしまして、「観光と文化を融合する取り組み」ということで、こちらの写真は総社市文化協会の主催で行われております「れ

とろーど」というお祭りでございます。総社宮の門前町として栄えました商店街を舞台に、空き店舗の利用、あるいは民家に絵画や生け花を彩りまして、ミニコンサートや和太鼓といった多彩な催しを行いまして、昭和30年代の雰囲気味わえるイベントとして行っております。

先ほども少しご紹介いたしましたが、こういった商店街の活気を取り戻そう、あるいは観光で総社を売り出して行こうということで、観光について多数の方に委員として集まっていた、「総社観光プロジェクト」でいろんな企画を検討していただきました。その中の一つで既に動き始めた事業といたしまして、商店街を舞台に総社のデザインを統一して総社らしい街並みといったものを売り出していくために、のれんや木製の案内標識を作成いたしました。デザインは総社観光プロジェクト委員でもあり、工業デザイナーの水戸岡鋭治先生にお願いしました。濃い茶色の地に白色で紋等をあしらって周囲の町なみに溶け込んだ落ち着いたもので、一流のデザインで総社を売り出して行こうということで取り組んでおります。

また従来から行っております事業といたしまして、雪舟を身近に感じてもらおうということで、将来を担う子どもたちに雪舟体験学習を行っております。市内の小学生に雪舟さんと同じように小僧として修行してもらおうということで、座禅をしてもらったり、絵を描いてもらって毎年好評を得ております。

最後に総社市が現在力を入れております全国発信のまちづくりの事業について、2、3ご紹介させていただきます。

総社市では平成18年からゴミ袋の有料化をしてゴミの減量化に取り組んでまいりましたが、平成21年までに2万トンあったゴミが1万6千トンになり、約2割の削減に成功しました。また

昨今の不景気で市民の方が経済的に困っておられるということで、ゴミ袋の値段を半額にいたしました。ただゴミ袋を安くすると容易に捨てる方も増えると言う心配の声もありまして、そういったことのないように、ゴミ袋が半額になったことを逆の契機にさらにゴミを減らして行こう、またもし増えるようなことがあったら、ゴミ袋の値段を上げるというゴミ袋変動相場制といったものも取り入れまして、市民の各団体を代表する方と『総社みんなの約束』という調印式を行いまして、さらにゴミ減量に取り組んで行こうとしております。

また地方の公共交通は自動車社会の進展、あるいは高齢化といったことで、高齢者を中心に日常の足に困っておられる方が多数おられます。

またバス路線も赤字路線が増えていて、補助金も毎年増えていることから、市内全域を対象にした予約型の乗り合いのタクシーを走らせてドアツードアで人の移動を可能にし、料金も300円と低く抑えまして通院であるとか買い物に使っていただけるような高齢者の方の日常の足となる「新生活交通」を来年の4月から始めようと準備を進めております。

また総社市内には製造業の企業が多くありまして、外国人の方、特にブラジル人の方の就労者が多いということで、今年の3月に駐日ブラジル大使を招きましてSOJA BRAZILIAN DAYというフォーラムを開催いたしました。こういった取り組みを通じまして外国人にコミュニケーション、あるいは生活支援、地域コミュニティへの参画などを進めていきまして、多文化共生の地域づくりを推進していこうとしております。

最後に、総社を元気で売り出したいということで来年の2月27日も「そうじゃ吉備路マラソン」を開催することとしております。これまでのコ

ースに加えて、短い2.6キロ、それから家族連れの方にも参加していただけるファミリーコースを設けまして、昨年7,900人の方にご応募いただきましたけれども、それを上回るような大勢の方にぜひ参加していただきたいということで準備しております。早春の吉備路を満喫して走っていただけるイベントとして総社を売り出して行こうとしております。

最後になりましたが、このサミット開催に向けましてご尽力いただきました井原市の皆様に感謝申し上げるとともに、お集まりの皆様方ますますのご発展、ご健勝をお祈り申し上げまして私のご説明、報告とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。では続きまして、大分県豊後大野市の橋本市長、お願いいたします。

大分県豊後大野市

はい、皆様こんにちは。大分県豊後大野市の橋本でございます。

井原市で第13回の雪舟サミットが開催されるにあたりまして、

御尽力いただきました瀧本市長様、はじめスタッフの皆様にご心からお礼を申し上げたいと思います。

本日のテーマでございますけれども、「地域文化を生かしたまちおこし」についてお話する前に、少しだけ豊後大野市のご紹介を申し上げたいと思います。座らせてさせていただきます。



青いのは清流、大野川でございます。赤が大陽をシンボルとした市章でございます。

豊後大野市は、平成17年3月31日に5町2村が合併をして、誕生をいたしました。

現在、人口は合併後も年々減少しておりますけれども、40,700人で、面積は603平方キロと県下で3番目に広く、県土の9.5%を占めている状況であります。

本市の中央には、大分の母なる川・大野川が流れております。本市の地形の形成には、阿蘇山を代表する火山の活動が大きく関係をしておりますが、大野川は、その活動によって出来た起伏に富んだ複雑な地形を縫うように走り、県内屈指の田園地帯を潤し、古くから農業を中心とする人々の営みを支えてきております。

また、大野川やその支流には、先人たちにより多くの石橋が架けられており、地域の暮らしに密着した貴重な文化遺産として残っております。

本市が雪舟サミットの御縁をいただいたのは、大野川にかかる沈^{ちんだ}墮の滝が、その水量の大きさと力強さが、雪舟さんの目にとまったことに始まり、その波頭の荒々しさを「鎮^{ちんだばくす}田瀑図」として描かれたことによるものでございます。

市内には、沈^{ちんだ}墮の滝をはじめ、日本の滝百選に選ばれた原尻の滝など、優れた景観を持つ自然に恵まれており、観光資源としても重要なものとなっております。

その大野川の源流は、宮崎県との県境にあります祖母傾山系であります。ここは国定公園であります。ブナやツガなどの広大な原生林を抱えており、九州本土で最大の面積を誇っております。今、COP10、国連の生物多様性の会議が行われましたけれども、まさに生物資源の宝庫と言われる。実は九州で最後のツキノワグマを、今、九州本土で絶滅したと言われておりま

すけれども、最後に発見されたのがこの傾山系であります。私自身はまだこの中に熊がいると思っております。友人が目撃をしておりますので、いずれまた発見の情報が出てくるだろうと思います。

そういった意味で、このような自然の歴史の中で育まれた、名水と田園、そして多様な生活文化など有形・無形の地域資源を、今後も大切に守り育てて、引き継いでまいりたいというふうに考えております。

本市の気候は、四季を通じておおむね温暖で、極めて農耕に適しており、古くから稲作を中心とした農業を基幹産業として発展をしてまいりました。

特産品は、しいたけ、葉タバコ、豊後牛、かんしょ、ピーマン、さといも、かぼす、それからお茶等があげられます。

特にしいたけは、栽培発祥の地と言われております。まゝこれは言ったもの勝ちでございますけれども、実際に1799年、豊後国誌の中に大量の取引が記録をされておりますので、我々はこれが発祥の地だというふうに、そしてまた日本一と言わなくて、私は世界一と言っているわけですけれども、大分県がしいたけの品評会、団体で連続12年連続の日本一と、その中心をなしているのがこの豊後大野市のしいたけづくりという事が言えると思います。

農業を取り巻く状況というのは、非常に厳しさを増しておりますけれども、我々は農協と行政が一緒になった農業振興センターというものを作って、この一次産業の振興というものを本当に力を入れてやっていこうということでございます。

続きまして、雪舟さんとのかわり合いでございますけれども、本市は約400年間続いた豊後大友氏の発祥の地といわれ、大友氏にまつわ

る多くの物語や史跡が残されております。雪舟さんは、この大友の時代の15代目当主親繁ちかしげの時代、西暦1476年の頃に豊後の国を訪れ、その途中で大野の里に立ち寄りました。かつて学んだ明国の長江をしのび大野川を上っているうち「沈墮ちんだの滝」に出会い、眼前に迫る巨瀑に心を奪われ、雪舟の生涯で記念すべき大作「鎮田瀑図ちんだばくず」を描いたわけであります。

この画聖雪舟が描いた「鎮田瀑図ちんだばくず」の「沈墮ちんだの滝」は大野川の本流にかかる高さ17m、幅110mの雄滝と高さ18m、幅4mの雌滝の2瀑からなり、「豊後のナイアガラ」と呼ばれ雄大な景観をなし、滝つぼには大蛇が住むという伝説もあり、神秘に満ちた滝でもあります。



こうした背景をもとに、地元ではこの美しい景観をまちの財産として地域おこしに役立てていこうということで、第5回雪舟サミットが開催された平成6年に地域が一体となって「ちんだ滝の会」が発足をいたしました。今日もその会の方々と一緒に参加をさせていただいております。

以来、この会が中心となって、枯渴した沈墮ちんだの滝の落水の実現を始め、公園整備等地域住民が一体となった地域づくりが活発に行われるようになり、前回のサミットで皆様にも御参加をいただきました「雪舟まつり」が、この地域で毎年開催されております。

それに加え雪舟の心に少しでも触れようと水

墨文化の里づくりとして、学校教育にも水墨画を取り入れ、雪舟と水墨文化に深くかかわってきております。

それでは、今回のテーマでございます「地域文化を生かしたまちおこし」についてお話をさせていただきます。

地域文化と申しまして、様々なものがあるわけですが、本市には先程申し上げました石橋や、石仏、磨崖仏などの石造文化が多く残っております。また、神楽や獅子舞、棒術や羽熊といった無形民俗文化財も数多く保存され、継承されている地域でもあります。その数は121にも上っております。

なかでも神楽は、「大野系岩戸神楽」の発祥地でありまして、現在市内にある神楽座は3流派19団体を数えます。

地域の祭りが多く残る本市におきましては、奉納舞としての役割も強く残っており、地域にとってはなくてはならない存在でもあります。

大野系岩戸神楽は、現在、御嶽流神楽おんたけ・浅草流神楽あさくさ・深山流神楽ふみやまの3流派に分かれております。なかでも、清川町に残る御嶽流御嶽神楽おんたけ おんたけは、その伝統的格式を強く残す所作、技術、さらには舞に対する意識が高く評価され、平成19年3月に国の重要無形民俗文化財に指定をされたところであります。

しかしながら、過疎高齢化によって後継者がいない団体も出てきており、伝統の継承が難しい状況にあるのも事実であります。

そこで、昨年6月に、本市が全国に誇れる歴史的価値の高い伝統文化を情報発信するために、都市住民との交流の場として「神楽会館」をオープンいたしました。

オープン以来、昨年度は延べ10回の公演を行い、今年度は13回の公演を予定しております。

これまで、地域で守られ伝えられてきた民俗

芸能の価値を、まず市民自身が再認識し、それを保持する団体、それを支える市民一人ひとりが誇りを持てるようになることが、地域に元気、活力を与え、郷土愛の醸成、過疎、高齢化社会に負けない地域力の向上を図ることが大事だと考えております。

つぎに、石造文化などの有形文化財の活用でございますが、これまでは、これらの文化財が観光やまちづくりに十分活かせていないのではないか、という声が市民の中にありました。

そんな中で、市内に多く存在するこれらの文化財をより多くの方々に知っていただき、観光資源として活用していこうという活動が始まりました。

市の観光協会が中心となりまして、ボランティアガイドと一緒に歩きながら、文化財等の名所などを巡る「エコウォーキング」という取り組みであります。

この取り組みのきっかけの一つになりましたのは、過疎高齢化が進む中で、さらに町村が合併し、周辺部の町はどんどんと寂しくなっていくと、これではいけないというふうに危機感を持った方々が始められたイベントであります。

自分たちで、何か地域の活性化に繋がる取り組みが出来ないだろうかと、ある地域の方々は、自分の町にお客さんと呼べるイベントをやってみようということで考えたわけであります。

そして、イギリスの文化であるカントリーウォークをお手本にして、ガイドと一緒にゆっくりと田舎道を歩いて、草花を見て季節の移り変わりを感じ、途中にある史跡などを見て回るイベントを始められました。

市の観光協会では、それらの取り組みをお手本として、エコウォーキングとして市内全域のマップの製作、ボランティアガイドの育成などを行っております。地域では、それぞれの町で

それぞれのやり方で取り組みをしておりますが、自分たちが住んでいる地域へお客さん呼び込んでガイドをすることが、単に観光のお客さんを増やすだけではなく、自分たちの地域の歴史や文化、環境についても見つめ直す機会になっております。

今後、このような取り組みが広がっていくことが、豊後大野市の情報発信はもちろんのことですが、まちづくり、地域づくりに繋がっていくものと期待をしております。

さらに、食文化につきましては、本市には独自の発酵食品文化がございます。私達は小さい頃、これは饅頭でありますけれども、三時のおやつでよく食べていたのはこの酒饅頭でありました。以前は、各家庭で米麹を発酵させて酒を造り、それを地粉と呼ばれる小麦粉と混ぜて捏ね合わせて饅頭を作っておりました。

最近では、各家庭で造ることは少なくなりましたが、この文化を観光資源として生かしていこうと、酒饅頭を販売している市内13か所の店舗を「酒饅頭の駅」として登録し、パンフレットの作成などしているところです。

私たちは、過疎高齢化という大きな課題を抱えている地域でありますけれども、地域に有する自然や歴史、そして文化や芸能について、市民自らがその素晴らしさを認識し、さらに他の地域に向けて情報発信していくことが「地域文化を生かしたまちづくり」に繋がるものであると考えております。

市民の皆様が主体となって、様々な地域文化を生かしたまちづくりの活動を行える環境をつくり、側面的に支援していくことが我々行政の役割であると考えております。

以上、簡単ですけれども、豊後大野市の「地域を生かしたまちづくり」についてお話をさせていただきます。

本日は、せっかくの機会でありますので、サミットに参加されている市や町のまちづくりについての取り組みをお聞きし、今後の参考にさせていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いをいたします。どうもありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。では続きまして島根県益田市の福原市長、お願いいたします。

島根県益田市

ただいまご紹介をいただきました島根県益田市長の福原慎太郎でございます。2年前の就任当時、35歳で最年少市長でございましたけども、現在37歳で頑張っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



今日は、瀧本市長をはじめ、井原市の皆さんには本当に設営ありがとうございました。それでは益田市の紹介をさせていただきます。

はじめにこれは、市の花、水仙でございます。市内東部の鎌手地区に地元住民の方々が植えられた水仙公園でございます。

益田市の位置は、島根県の西部にございまして、隣は山口県の萩市、南は広島県と接しております。人口は約51,000人、皆さんと同じ高齢化と過疎に悩むまちでございます。

今日はですね、益田市にはいっぱいいいところがあるんですが、厳選してお伝えしたいと思います。

まず初めに2年連続水質日本一に輝いて唯一

ダムのない一級河川であります高津川でございます。その下が中国地方、中山間地域に特有の赤瓦、これは島根県西部の石州瓦というのが特産でございますけれども、この赤瓦の街並みがございます。そして真ん中が中山間地にあたります匹見地域の匹見峡、それから紅葉の写真でございます。右側が我々の誇る持石海岸の夕日と海の風景です。日本海側と言うと暗いのではないかなというイメージがあるかも知れませんが、夏はあのようなエメラルドグリーンの海であります。私は日本一と思っているきれいな夕日があります。ちなみにこの右の二枚の写真は、私が自ら撮った写真でございます。私が撮ってこれだけ素晴らしいという事は、いかにいい風景だという事がご理解いただけるかと思えます。

次に益田市の偉人を紹介したいと思います。左上が万葉歌人の柿本人麿。生誕、終焉の地という伝承があり、市内には2つの柿本神社がございます。その隣が戦前は活動弁士、戦後はマルチタレントとして活躍をされた徳川夢声でございます。来週、徳川夢声の市民賞ということで色々な言葉を扱っている方々に市民賞を贈呈しております。左下が囲碁棋士の岩本薫さん、日本棋院の理事長を務められた後、世界に囲碁を普及された郷土の偉人で名誉市民でもあります。そして真ん中が梅毒の特効薬「サルバルサン606号」を発見した秦佐八郎博士でございます。東の野口英世、西の秦佐八郎と並び称されるほどの化学者でございます。ちなみに秦博士は現在の岡山大学医学部で学んで世界的な化学者、医学者になりました。そして右端が、皆さんも篤姫の脚本でご存知の脚本家、田淵久美子さんでございます。来年も大河ドラマ「江」の脚本を担当されます。我々としては、郷土の誇る偉人でございます。田淵さんにも名誉市民の贈呈を昨年したところでございます。

次に益田市の特産品をご紹介しますと、左上が天然の鮎です。高津川の恵まれた水質の中で育まれた天然鮎でございます、日本で一番いいというご評価もいただいております。その隣が、最近ここ数年で年間10トン以上獲れるようになりました大きなハマグリでございます。7センチ以上のものしか獲らないという事で、乱獲をしないという漁協の方針で保護をしながら取り組んでいるところでございます。また岡山県産ほどの大きなものではありませんけれども、様々な特産のブドウ、トマト、メロン等が取れる地域でございます。

そして益田市は海から山まで恵まれたまちでございます、こちらのわさび田、わさび谷は標高1,000メートルのところにあるもので、非常にきれいな水が流れ、恵まれたわさびの栽培条件が整っております。こちらのわさびも、大変素晴らしいという評価を業界の関係の方にはいただいております。

次に益田市は柚子の産地でもございまして、中国地方では一番柚子の取れる量が多いという事で、ゆずラーメンや様々な加工品を現在地元を中心に作っているところでございます。他にもございましてけれども今日は時間がありませんので、ここまでとさせていただきます、次に益田市の主要施策をお話したいと思います。

私は、益田市を一流の田舎まちにしたいという方針で市政運営を行っております。これは二番手、三番手の都会を求めるのではなくて、益田にあるもの、田舎の良さを活かして、一流、本物をつくっていかうということでございます。三つの側面から話をしているのですが、人間的な側面では、まず自分のふるさとに自信と誇りを持って、生涯現役で安心して暮らせるまちをつくりたい、ということでございます。そして二番目の経済的な面は、公共事業や様々な国や

県からの補助金が少なくなる中で感動できるものづくりとサービスをしっかり行って外貨を獲得して行こうという方針でございます。

そして三番目は、先ほどご紹介した益田市の美しい景観、それからこれからは特にデザインというものがより大事になると思いますので、そういう見た目の視覚を大事にしていこうという三つ目の方針でございます。

次に雪舟さんと益田市の関わりについてお話したいと思います。

まずこちらはですね、益田兼堯の像でございますけれども、益田市は益田氏という殿様が1200年から1600年くらいの約400年間、島根県西部、それから遠くは博多の方まで領地を持って、統治をしていたところでございます。この益田兼堯というのは15代の当主でございます、山口を治めていた大内氏との関係で、益田兼堯が益田へ雪舟を招いて、数少ない肖像画を描かれたものでございます。この益田兼堯像はふるさと創生1億円で購入したものでございます。そして右の「四季花鳥図屏風」は益田兼堯の孫の家督相続のお祝いとして、雪舟が描いて贈ったものといわれております。

益田には雪舟が作ったお庭が二つあります。左側の方が萬福寺の雪舟庭園、右側の方が医光寺の雪舟庭園です。医光寺は元々が崇観寺というお寺だったんですが、こちらに第5代目住職として雪舟が迎えられました。この二つの庭園は600メートル離れたところがございます。

また益田市も雪舟さんの終焉地という伝承がありまして、先ほどの講演でご紹介も少しありましたが、元々は東光寺というお寺があって、その後は大喜庵となり今残っております。こちらに雪舟さんのお墓が残っており、地元の人も雪舟さんのお墓にお参りをしているところでございます。

そして、先ほどご紹介した益田兼堯の像等を収蔵しているのが益田市立雪舟の郷記念館でございます。雪舟の名前がついた単独の記念館という意味では全国唯一というふうに言われております。様々な複製画等もございますので、ぜひ皆さん益田にお越しの際には記念館にお立ち寄りをいただければと思います。大喜庵、雪舟さんのお墓、雪舟の郷記念館は隣接をした地域にございます。

次に海外との交流という意味ではですね、雪舟さんが渡った中国のニンポウ、寧波市ねいはしと平成3年から友好交流議定書を結んで、青少年の交流事業等を行っているところでございます。

次にサミットテーマの「地域文化を生かしたまちおこし」についてご紹介をさせていただきます。

私が就任以来、文化と観光、その他交流事業を一括して行うセクションを作ろうということで、文化交流課という課をつくりました。それから、商品開発や販路開拓をしっかりやっとうこうということで、産業支援センターという部署をこの4月に設置いたしました。そしてその文化交流課に基づいた観光会議、大会等をしっかり戦略的に考えて行こうということで、集客交流戦略会議というものを立ち上げたところでございます。

神楽のお話は先ほどからありますし、今日も素晴らしい子供神楽を見せていただきましたけれども、益田市をはじめとした島根県西部、石見地域いわみも石見神楽が大変さかんところでございまして、八調子のリズムの軽快さと豪華な衣装で皆さんに好評をいただいております。現在は、毎週日曜日に定期公演を行っておりまして、遠くは来年、サウジアラビアの方まで公演を行う予定にしております。石見神楽はですね、後継者に困らないという数少ない伝統芸能でござ

いまして、石見神楽いわみをするために地元に戻ってくる、もしくは残るといふ子供さんもおられるような、今現在盛んな神楽となっております。

そしてここからは、益田氏が治めたまち、益田市でございますけれども、中世の町割り、それから港等の史跡、それから益田家文書という文書が残っておりまして、研究者の方からも非常に中世の資料がそろった珍しい一級のみちだという評価をいただいております。そういう中で毛利氏をもてなしたという文書の中の「中世の食」を再現するというプロジェクトを一昨年こぞから若い方々を中心に始まっております。こちらが、毛利元就公に献上した祝い膳を復元したものでございます。こちらは先生と皆さんで試食会を行ったり、今年は記録集を作って現在皆さんに販売しているところでございます。そしてその中から二つの商品ができました。1つは中世の時代は醤油がなかったので、『煎り酒』という調味料を使っておりました。それを市内の醤油屋さんが先般復元をして発売をされました。2つ目は『与左衛門』という当時のあまいお酒なんですけれども、こちらを右田本店という1602年創業、島根県で一番古い企業で、中国地方でも二番目に古い企業である酒蔵の方々が復元をされたものでございます。当時は甘いお酒で塩からい料理を味わっていたということでございます。

そしてこちらは、神楽の定期公演も行っている美術館とホールホールの複合施設の通称「グラントワ」というふうに我々呼んでおりますけれども、島根県芸術文化センターでございます。大変素晴らしい建築物でございまして、28万枚の石州瓦で覆われております。先般は京都の迎賓館と並んで公共建築賞の特別賞を受賞したところでございます。

最後に益田市から今後の雪舟サミットの盛り

上げのために提案をいくつかさせていただきたいと思います。私も平成14年の雪舟展にお邪魔をしました。そしてその後、主催の毎日新聞の方にですね、どれぐらいの人数が入ったかということを知りましたら、東京・京都あわせて50日間で50万人の人出があったということでございます。雪舟はそれだけ素晴らしい皆さんの評価をいただいているんだなということを改めて実感をしたところでございますが、残念ながらそれぞれの自治体では、まだまだこれから取り組みをするという課題があるかと思っております。そういう中で4つ、ご提案をさせていただきたいと思います。一つは、もう実現されているところもあるかも知れませんが、雪舟サミット参加自治体の雪舟の関連の施設の資料等を相互の施設に置いてですね、雪舟さんを見たいと訪れた方が、情報を得られるようにしたらどうかという提案でございます。二つ目が、共通イベントの開催ということです。益田の雪舟の郷記念館でも益田兼義像を年に二回公開しております。サミットには参加されておられませんけれども山口県の防府市の毛利博物館でも11月に大体「山水長巻図」を公開をされております。そういうふうに、例えば11月に一緒にイベントを行って統一の情報発信をしていく、こういう事も必要ではないかと思っています。そして3つ目は、今日もサミットの参加自治体の冊子がありましたけれども、雪舟さんを見たいなという方が例えば1枚のチラシであったり1冊の本を見たら、どこでも地図も詳しく書いてあって行けるというようなものを作ってはどうかというご提案でございます。率直に言って私も自分1人で行こうと思ったら、中々色々な施設はおそらく行きにくいんだらうなというふうに思いますので、観光客の方が誰が見ても分かるような、そういう冊子を作ればそれぞれのまち

を回れるのではないかなと思います。そして最後に、先ほども少しお話がありましたけれども、構成市町間の交流イベントを行って、様々な交流、子供たちの交流を含めてやっていけばいいのではないかなと思っております。

以上、早口でご説明いたしましたけれども、益田市の説明を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

< 司会 >

ありがとうございました。では続きまして、山口県山口市の渡辺市長、お願いいたします。

山口県山口市

御紹介たまわりました山口市長の渡辺でございます。本日はこの第13回の雪舟サミットをこのように盛会に開催していただいております、井原市の市長さん、そして議長さんはじめ、関係者の皆様方に心からお礼と感謝を申し上げます。

それでは山口市の紹介、そして雪舟の史跡等につきまして少し説明をさせていただきます。

山口市は山口県の中央部に位置する県庁所在地でございます。本年1月、旧阿東町と合併いたしました。人口は約20万人、県内2番目の規模となりました。そして面積は1,023平方キロとなりまして、県下最大の面積を有する自治体となりました。

本市は、新幹線の新山口駅、そして山陽自動車道、中国自動車道など、広域交通網の結節点でございます。県内各地への移動にかかる所



要時間は約1時間と、交通の利便性に大変優れた地域でございます。

本市への往来の玄関口であります新山口駅につきましては、来年度から、駅舎を含めて周辺整備をしまっていることといたしております。この「ターミナルパーク整備事業」に、具体的に着手することといたしております。南側の新幹線口と北側の在来線口とを結ぶ自由通路の新設や在来線側の駅前広場の整備など、利便性を高める様々な機能強化を図ることといたしております。



また、現在山口県下では、来年10月に開催となります第66回国民体育大会「おいでませ山口国体」に向け、「ちょるる」をマスコットキャラクターといたしまして、行政と市民の方々が一体となって、来訪される皆様を温かくお迎えするための諸準備を進めているところでございます。

山口市におきましては、開会式・閉会式をはじめ、陸上競技や水泳、サッカーや卓球など、14競技を開催する予定でございます。どうか皆様方にもおいでいただければと思います。

次に、本サミットの主題でございます「雪舟」と本市の関わりにつきまして、お話をしてみたいと思います。

歴史的には、室町時代に遡りますが、当時の山口を治めておりましたのが、守護大名大内氏

でございます。現在の中国地方から九州北部にかけての地域を領国とするほどの権勢を誇っておりました。大内氏は、国際貿易、特に中国の明国や朝鮮、さらには琉球王朝との貿易を盛んに行い、経済的にも文化的にも発展し、当時の山口は、西の京と称される程に繁栄しておりました。雪舟が山口を訪れたのも、こうした時代背景があったからであると考えられます。その後雪舟は、大内氏の擁護を受けまして、中国へ渡って水墨画を学び、帰国した後は、各地を遊歴したのち、また山口に落ち着きまして、アトリエであります「雲谷庵」を拠点として、制作活動を行ったところでございます。

また雪舟は、作庭、庭造りにも造詣が深く、室町時代中期、大内氏第29代当主大内政弘が雪舟に依頼して作庭したといわれておりますのが、常栄寺雪舟庭でございます。三方を林に囲まれた庭は、水と石に主体が置かれ、簡素にして豪放、雪舟の山水画そのままの名園として、その名が知られております。

今年1月に旧阿東町と合併いたしまして、新たに加わりましたのが、阿東地域の国指定名勝でもあります常徳寺池泉式鑑賞庭園でございます。この庭園は、石の構成や組み方に雪舟にしか見られない傾向がありますことから、雪舟の作庭であるといわれております。本市には、これらの雪舟に関連した地域資源に加えまして、自然や歴史に彩られた様々な資源がございますので、それも簡単に御紹介したいと思います。まず、御紹介いたしますのは、大内氏第25代当主大内義弘を弔うために、弟の盛見もりはるが建てたもので、日本三名塔のひとつに数えられております国宝瑠璃光寺五重塔るりこうじでございます。

明治36年に国宝に指定され、毎年約50万人を超える多くの観光客でにぎわっております。

この瑠璃光寺五重塔るりこうじ周辺では、神社仏閣や公

共施設、あるいは一般民家が協力し合いまして、貴重な歴史的・文化的遺産を一斉に公開する「山口お宝展」が毎年春に開催されます。来年の開催は2月の11日からでございますので、ぜひ足をお運びいただければと思います。その折には五重塔も中身が見えるように開陳をされるところでございます。

また、瑠璃光寺五重塔るりこうじからほど近いところに、山口サビエル記念聖堂がございます。西日本で強大な力を誇った「大内氏」は、雪舟などの文化人を迎え入れますとともに、フランシスコ・サビエルにキリスト教の布教を認めるなど、国際的な経済交流、文化交流を盛んに行っていました。

こうした歴史的背景や「日本で初めてクリスマスミサが行われたのは山口である」という史実を基に、毎年12月には、「日本のクリスマスは山口から」と題した市民自主企画のイベントが行われております。写真にお示ししておりますとおり、公園の木々や街路樹はたくさんのLEDに飾られサビエル記念聖堂を形取ったイルミネーションは、幻想的な空間を作り出します。このイベントは、山口の冬の新たな観光スポットとして定着をしております。

そのほか、まちの中心部には山陽路随一の湯量と75度の湯温を誇りますところの湯田温泉がございます。年間80万人の観光客の方々に御宿泊をいただいております。毎年4月初めの土日には、「湯田温泉白狐まつり」が開催されまして、旅館の内湯に無料で入ることのできる内湯めぐりや、県道を練り歩く総踊り、高田公園を中心といたしました各種イベントなど、様々な催しが行われております。

湯田温泉には、山口の生んだ詩人中原中也を顕彰する施設「中原中也記念館」がございますが、ここでは中原中也の研究に取り組むとともに

に、中에도に関連する様々な企画展示が行われております。

次に御紹介するのが、これも湯田温泉に程近いところにあります「山口情報芸術センター」でございます。このセンターは、市立図書館を併設する本市の芸術文化創造拠点でございます。過去には今非常に話題になっております坂本龍一さんが作品の滞在制作・企画展示を行われるなど、我が国でも数少ない滞在制作を可能とするアートセンターとして世界からも高い評価をいただいております。色々な国のアーティストが制作活動に訪れておられます。

また、明治から昭和にかけて数々の政治家や文人が利用しました由緒ある料亭を移築・保存し、6年前にオープンいたしましたこの山口市菜香亭さいかていは、100畳の大広間を有しまして、そこには伊藤博文公、あるいは岸信介先生、佐藤栄作先生など山口県が輩出したしました8人の総理の扁額、あるいは井上薫、木戸孝充等の明治の著名な方々の直筆の扁額が展示されております。

また最近の様子をご紹介しますが、来週の11月27日に新たにオープンいたしますところでございますが、これは「私小説の極北」と称されました昭和初期の作家であります嘉村磯多の生家を保存・整備した「帰郷庵ききょうあん」でございます。

これは、小説家の生家であるということと、築後130年を経た茅葺き屋根の古民家でもあるという二つの魅力を同時に生かしまして、都市部と農山村部の交流の拠点にするために、このたび改築し整備したものでございます。

この施設は、囲炉裏やかまど、五右衛門風呂などの昔懐かしい造りを取り入れまして、周辺の豊かな自然環境と調和した宿泊のできる施設といたしておりますので、ぜひ一度ご利用いただければと思います。

私は、これからのまちづくりには、こうした

各地域に残る様々な資源を掘り起こし、磨きをかけ、高い付加価値を創造していくことが大変重要であると考えております。

この雪舟サミットに参加するそれぞれのまちには、雪舟に関連する素晴らしい素材や資源がありますとともに、それぞれの歴史的・文化的資源、あるいは自然や食材など、他にはない魅力的な素材がたくさんあると思います。

これらを効果的に組み合わせまして、人を惹きつける一つの物語として提供する仕掛けづくり、そして、これらを情報発信する力が、都市の魅力づくりには欠かせない要素となるものではないかと思っております。

そして、これらを一つの自治体の中だけで完結されるのではなく、先ほどから色々提案されておりますが、より効果的に他の地域と連携し、有機的につなげることが、観光をキーワードとしたまちの賑わいづくりの有効な手段となるものと考えております。

本市といたしましては、今後は、来年3月に九州新幹線が中国路を通過して新大阪まで直結するというございますので、これをきっかけとして、国内観光客の誘致にも、より積極的に取り組まなければならないと思っております。さらには、今後増加が見込まれます中国、韓国、台湾など海外からの観光客をターゲットとする戦略を模索するなど、グローバルな展開を視野に入れた取り組みも重要であると考えております。

こうした外国をターゲットとした戦略につきましては、どうしても連携した観光地、広域的な観光地、そういったものを売りに出していく必要があると考えております。本日の雪舟サミットでは、こうしたことを踏まえながら、観光分野をはじめ、そのほかの様々な分野につきまして、幅広い情報交換をさせていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

それでは最後に岡山県井原市、瀧本市長お願いいたします。

岡山県井原市

はい、それでは開催地であります井原市長の瀧本でございます。本日は、雪舟ゆかりの多数の皆様方をお迎えしまして、



「第13回雪舟サミット」がこのように盛会に開催できましたこと、改めて皆様方に御礼を申し上げたいと思っております。

それでは井原市の紹介に移りたいと存じます。

井原市でございますけれども、岡山県の西南部、広島県の福山市との境に位置いたしております。県境でございます。冒頭の挨拶でご案内をいたしましたとおり、平成17年3月に井原市、そして旧芳井町、旧美星町と1市2町の合併を行いまして、市の面積は243.36平方キロメートルでございます。そしてこれが市の現状、概況を映しております。

そして特産品でございますけれども、井原市は古くから綿花の栽培が盛んな地域でございます。繊維産業を中心に発展してきました。この伝統を受け継ぎまして、昭和40年代以降はジーンズ生地であるデニムの生産が盛んになりまして、「ジーンズのまち」として全国に発信をいたしておるところでございます。井原産のデニムというのはシャトル織機しよつぎと呼ばれる旧式の機械で織られておりまして、手織りに近い風合いが再現できることから、国内外の有名ブランドのバイヤーが、生地の買い付けに訪れており

ます。

また、芳井町の明治地区の特産物に「明治ゴボウ」というゴボウがございます。我々のところでは、「ゴボウ」と言わずに「ゴンボウ」というふうに言っておるんでありますけれども、味と香りがよく、また肉質がち密なことから歯切れが良く、長持ちすることが特長でございます。

昨年の4月から、井原鉄道の利用促進を図るために井原駅構内の『kitchen いっちゃん』で「明治ごんぼうバーガー」とごんぼう等井原線沿線の特産品を詰め込んだ「いばらーめん」を、また今年の3月からはごぼうをソフトクリームに練りこんだ「ごんぼうソフト」を販売いたしております。

また一方では、西日本有数のぶどうの産地ということで、ピオーネ、ニューベリーA、瀬戸ジャイアンツ、ニューピオーネといったぶどうが多く生産されている地域でもあります。

またこの井原市には、吉備高原一体にみられた中世の村の様子を再現いたしました「中世夢が原」、美星は「美しい星」と書きますけれども、大変美しい星が見えるところでございますが、そこに天文台などもございまして、多くの観光客が来ておる状況でございます。

次に歴史の上から見てみますと、今から約800年前、源平屋島の合戦で平家の掲げた扇の的を見事、射落とした源氏の武将の那須与一公がその功績によりまして源頼朝から全国に5つの荘園の地頭職を拝領しましたが、その内の1つが井原市の東部を中心とした備中国荏原郷びつちゅうのくにえはらごうでありまして、市内にはこうした与一公や一族の墓など、ゆかりの史跡が多く残されております。

また、初めて戦国大名といわれ、北条氏の礎を築いた「北条早雲」は同じくこの備中国荏原郷びつちゅうのくにえはらごうの領主伊勢氏の出身でありまして、井原では伊勢新九郎盛時いせしんくろうもりときと名乗って青年期まで過ごした

と伝えられております。

そして井原市は、近代彫刻界の巨匠といわれております「平櫛田中」ひらくしてんちゅう生誕の地でございます。「いまやらねばいつできる、わしがやらねばたれがやる」の名言をご存知の方はたくさんいらっしゃると思いますが、平櫛田中は明治5年にこの井原市に生まれました。井原市立田中美術館でんちゅうには、この「平櫛田中」ひらくしてんちゅうの作品を保存展示いたしまして、永くその偉業をたたえております。郷土文化の向上に役立てるために開館をいたしておるところでございます。ちょうど今、秋の特別展を開催いたしております。「岡倉天心と日本彫刻界」という展示をいたしております。明日時間がもしありますれば、ぜひご覧いただきたいと思っております。

また井原市は、日中友好のために一生を捧げました「内山完造」生誕の地でもありまして、内山完造は28歳で上海に渡りまして、抗日運動の中にあって中国のよき理解者として精力的な活動を展開いたしました。昨年は内山完造の没後50周年ということもありまして、地元の顕彰組織であります「先人顕彰会・井原」が中心になって、没後50周年の記念事業が開催されたところでもあります。

井原市には「先人顕彰会・井原」の他に、「雪舟を語る会」という市民グループもございまして、雪舟の顕彰活動を活発にされております。平成18年には雪舟を語る会主催によりまして没後500年記念事業が開催されたところですし、同じく雪舟を語る会作成の雪舟の生涯を書きました冊子、「雪舟ものがたり」を発刊されております。また今回の雪舟サミット開催におきましても色々ご協力をいただいております。

雪舟と井原市のかかわりについて申しますと、雪舟の生涯には多くの説がとられておりますし、

先ほど宮島先生のお話にもございました。この終焉の地につきましても、益田市さんや山口市さんなどの説もありますし、また京都にある雪舟とかかわりの深い東福寺の記録をまとめた「東福寺誌」や「吉備物語」などの文献によりますと、雪舟が井原市芳井町にあります重玄寺で没したというふうには伝えられておるところでございます。

また雪舟と重玄寺との関係を思量する新たな史料が発見されたところでございます、それが重玄寺を開いたとされておる千叡和尚の語録「也足外集」であります。この「也足外集」の中に雪舟の一族と思われる人物の名前が記されていることが確認されているところでございます。この「也足外集」でございますけれども、雪舟が重玄寺で没したことを決定する資料ではありませんけれども、雪舟と広島県三原市にあります臨濟宗仏通寺派の本山、仏通寺並びに重玄寺を結びつける重要な史料でございます。

また今回の雪舟サミットの開催にあわせて、芳井歴史民俗資料館では「雪舟と重玄寺」展を開催しております、こちらも明日の視察でご案内する予定にしております。

続きまして井原市の主要な施策ですが、平成20年度から29年度までの10年計画「井原市第6次総合計画」について、実施しておりますところでございます。中でも私ども、「健康寿命日本一」を目指しております、健康寿命を延伸するための拠点施設として「いばらサンサン交流館」をこの4月にオープンいたしました。また笑いの効能による健康づくりを図る「笑って健康元気アップ事業」を実施しております、落語家を学校や公民館に派遣するなど笑いを取り入れた事業を展開いたしておりますところでございます。

また最近の井原市の話題でございますが、今月の7日に全国高校駅伝競走大会の予選を兼ねた岡山県高校駅伝大会が井原運動公園陸上競技場を発着点として開催されております。興譲館高校、女子の陸上部が12連覇を果たしまして、

年末に京都の都大路を走ることが決まりました。現在、6年連続表彰台に立っております、今年も5年ぶりの全国優勝を目指しておりますところでございます。大変期待をいたしておりますし、明日の中国高校駅伝競走大会が、この井原市が公認コースで実施されております。ちょうど視察をいただく芳井町は、コース周辺になりますので、ひょっとしたら応援いただけるかなと思っておりますところでございます。

また岡山県内では、先月の30日から今月の7日までの9日間に渡って、国民文化祭が開催されました。井原市では冒頭で申し上げましたけれども、彫刻展と子守唄フェスティバル&サミットを開催いたしましたところでございます。

このフェスティバル&サミットにおきましても、首長によるサミット会議、参加自治体各地の子守唄やゲストによる唄の披露、あわせて野外で茶席や物産展などのイベント等も行われまして、大変盛況で開催することができました。

今回で2巡目の雪舟サミットが終了いたしますけれども、本日までご参加されておりますそれぞれの首長さんのお話をお聞きいたしまして、いろいろ参考にさせていただき、第3巡目に向け新たな交流を生み出していけたらと考えておるところでございます。

最後になりましたけれども、今回の雪舟サミット開催につきましてご協力いただきました関係自治体の皆様に心から感謝を申し上げます、私どもの報告とさせていただきます。大変ありがとうございました。



んを見たいという人に何が提供できるかということについて申し上げました。先ほど雪舟展が50日間で50万人ということをお願いしましたが、山口県での国民文化祭の時も10万人以上来られましたよね。ですからそれぐらいの人が来られるわけで、雪舟の事を知りたいという人が中々情報が分からないと思うんですね。そういう方に提供してはどうかということでした。補足で申し上げますと、例えば今日も本が販売されていたりですね、益田市でもそういう冊子や「雪舟かるた」みたいなものも作っています。で他にも「雪舟」という名前がついたお酒もあります。こういう本とかグッズとかを買いたい人が例えば情報が分からないわけですね。こういうものをホームページで一元化をすることでですね、何か情報をうまく集約できればいいなという視点でお伝えをしたところでございます。そのためには先ほど、川崎町長からもお話がありましたけれども、やはり担当者の会議をもう少し増やして、お互いに意見調整、情報交換を行っていくこと、それから先ほど防府市の例も出しましたけれども、情報提供の中にはサミット参加自治体以外の雪舟に関連する地域や色々な物ですね、情報も盛り込んでいくと、より好きな人にはいい情報提供ができるんじゃないかなという意味で、ご提案をさせていただきました。以上です。

【井原市長】

はい、ありがとうございました。その他、ご意見があればお聞きしたいんですが、ちょっと時間の都合もございましてこの辺でやめたいと思います。

提案のありました事業のうち、共通のチラシについては、今日皆さんに配布している資料の



中に「雪舟の足跡」でございますか、これを入れておりますが、このパンフレットは構成市町に500部ずつ配布する事といたしております。

また相互にパンフレット等を置くことも比較的容易に取り組めるものであろうと思っております。この実施に向けましては、先ほどご提案がございましたとおり、担当者レベルで調整をしてみたいと思いますのでよろしくお願いを申し上げます。

交流事業につきましても、6つの自治体の住民が一堂に会して交流を進めるという事は難しい面もございますけれども、事業を通じて各自治体間の交流と連携を強化する面からも非常に有効な手段ではないかなと思っております。

過去のサミットにおきましては、各市町が開催するイベントや行事に積極的に参加をし、受け手側としてはその情報提供を行うとともに、温かく迎え入れて交流を深めようということが申し合わせているところでございます。

どのような交流事業ができるのか、あるいは共通イベントができるのか、また全国の雪舟ゆかりの地を紹介するパンフレット等の作成につきましても、今日このサミットにおいて結論付けるといことは大変難しいと考えられます。今後、先ほどご提案いただきましたとおり、事務局会議にて協議を進めていくこととしたいと考えておりますのでご了承いただきたいと思います。

皆様にはまだまだ発言をいただきたいと思いますが、この後の行事の時間もございまして、サミット会議はこれで終了したいと思います。どうもありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

本日は、時間は確かにあまり取れなかったんですが、各自治体の皆さんの地域文化を生かした取り組みというのをお聞きすることもできま

した。まちおこしのヒントを何か皆さんも得ることができたのではないのでしょうか。

発表いただきました皆様、本当にありがとうございました。

それでは続きまして、本大会のサミット宣言に移りたいと思います。

サミット宣言は、井原市長より申し上げます。

[サミット宣言は48頁参照]



【司会】

ありがとうございました。ただいま朗読させていただきますました宣言文に皆様ご異議はございませんでしょうか。(拍手)

ありがとうございます。皆様の拍手をもって、採択とさせていただきます。サミット会議のサミット宣言、ここに採択されました。

それでは続きまして、次期開催地の報告をさせていただきます。

次期開催地は、開催順によりまして岡山県総社市でございます。

どうぞ皆様、拍手をお願いいたします。

それでは、次期開催地総社市の竹田副市長へ瀧本井原市長からサミット旗をお渡ししたいと思います。

どうぞお二方、前の方へお進みください。

井原市から総社市へサミット旗が渡され、そして固い握手がかわされました。



それではここで、次期開催地であります岡山県総社市副市長の竹田正彦様から一言ご挨拶をお願いいたします。

【次期開催地報告】

岡山県総社市副市長
竹田正彦様



次期開催地に決定していただきました岡山県総社市副市長の竹田でございます。私の方から一言、ご挨拶申し上げます。まずはこの第13回雪舟サミットがこのように盛大に開催され、成功裏のうちに終わりました事を心からお喜び申し上げます。

さて地方分権、地域主権という言葉が言われ始めて久しいところですが、これからの本格的な地方分権時代の到来に向けて、ますます基礎自治体を取り巻く環境は困難な時代を迎えようとしております。そしてどこの自治体も頭を痛めているのが、財源の確保、そして地域の活力、そういった問題であろうと思います。そうした中で、地方が生き残っていくための核となるのが、地域を活性化し、魅力あるまちづくりを進めていくことであります。そういった中で、この雪舟サミットは平成2年に雪舟の業績を顕彰するとともに雪舟を通じて友好の輪を広げることを目的に、私ども総社市で第1回が開催されまして、既に20年が経過いたしました。この間、構成市・町で様々な地域活性化についての情報交換や交流を行ってまいりました。開催地も山口市さんに続き、総社市も3巡目に入ります。しかし今後ますますこういった活動が重要なものになるのではないかと考えております。サミット宣言にもありましたとおり、雪舟で結ばれました私たちがまちづくりについて互いに情報交換をし、住民も含めた交流や連帯を深めることで地域の活性化に結び付けていくことができるものと確信いたしております。

第1回の平成2年、平成9年に続きまして2年後の平成24年度は総社市で開催させていただきます。皆様方に総社市の魅力を感じていただ

き、交流の輪を広げるとともに絆をより深めていただけるようなサミットにしていきたいと思います。なにとぞ皆様方のご協力とご支援を賜りますようお願いいたします。そして多くの皆様のご参加を総社でお待ちいたしております。

最後になりましたが、この第13回雪舟サミットの開催にあたりまして、国民文化祭と同時期で、大変お忙しい中ご尽力いただきました、井原市長さんをはじめ関係の皆様方には、心から感謝申し上げます。またこの雪舟サミット構成市・町のますますのご発展を祈念いたしまして、次期開催地としてのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願います。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

それでは閉会にあたりまして第13回雪舟サミット実行委員会副委員長の井原市教育委員会佐藤勝也教育長より閉会のご挨拶を申し上げます。

【閉会挨拶】

第13回雪舟サミット実行委員会副委員長
佐藤勝也
井原市教育長



雪舟サミット旗が井原市から総社市の方へ先ほど引き渡されました。雪舟にゆかりのある6自治体がここに集いまして、雪舟の足跡をたどり、また雪舟をキーワードにした色々な取り組み、まちづくりにつきましてのご報告を聞かせていただきながら、改めましてこの雪舟の偉大さを再認識させていただきました。同時にこれからのまちづくりに大いに参考にさせていただけるということも思ったわけでありです。「地域文化を生かしたまちおこし～雪舟を通じて新たな交流を生み出す～」こうしたテーマで

開催をいたしました第13回雪舟サミットが各自治体の貴重なご提言をいただき、また先ほどは新たな交流事業へ向けてのご提案もいただきました。こうした中で無事に終了できますこと、大変ありがたく思っております。

井原市での雪舟サミット開催にあたりまして、基調講演をいただきました宮島先生を初めといたしまして、発表をいただきました各自治体の首長様、また多くの関係の皆様方に心からお礼を申し上げたいと思います。あわせて本日ご出席の皆様のみならずのご活躍、ご健勝をお祈りいたしまして、この会の終了とさせていただきます。大変ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。以上をもちまして第13回雪舟サミット会議を終了いたします。

なお明日は、雪舟ゆかりの地として重玄寺や芳井歴史民俗資料館などへの視察を計画しております。現在、芳井歴史民俗資料館では、特別展「雪舟と重玄寺」展を開催しております。23日火曜日までは、雪舟サミット開催にあわせて、特別に雪舟筆と伝えられております「千畝周竹和尚の頂相」も公開されております。この機会にどうぞ足をお運びください。またここアクティブライフ井原1階におきましては、この雪舟サミット記念としまして水墨画展も開催しておりますので、お帰りの前にどうぞご覧ください。

では、ご来場の皆様には長時間に渡りますご参加、誠にありがとうございました。お忘れ物のごいませんよう、どうぞお気をつけてお帰りくださいませ。ありがとうございました。